



家ごとの道掃きは、主に高齢者の役割



掃き掃除のついでにちょっとゆんたく



1月下旬の朝起き会。幼稚園から中学までの子どもと教員、保護者らが参加

## 道 掃きで毎日「見守られ」

朝起き会 〈渡名喜村〉

渡名喜島の集落道は、とても美しい白砂敷き。そして道の両側には、福木の生け垣が続いています。

福木は強風から家を守る一方、毎日多くの葉を落とします。ところが、日中集落内を歩いても、家の庭や道には、落ち葉がほとんど見当たりません。島の住民が、早朝5時から9時頃までの時間帯に、自宅周辺などを徹底的に掃くのです。

村社会福祉協議会のヘルパー主任、比嘉幸枝さん(55歳)によると、その主な担い手は高齢者。「暗いうちに起きて食事を済ませ、まず庭と周りの道を掃くのを日課にしている人が多いですよ。ひとり暮らしで具合が悪かったり、何かの都合でできない場合は、近所の人ややってあげます」。

84歳のひとり暮らし女性は、「道の掃除は体を動かすから健康にもいい」と話します。よほど天気が荒れない限り、毎朝庭と道を掃きまわす。通り掛かる人と立ち話をするのもしばしば。

これが実は、「見守り」と「見守られ」になっています。体調を崩すなどして家の外に出られないとき、

片付いていない落ち葉が異変を知らせるサインになります。「何かおかしいと思ったら、誰かがすぐ電話したり家を訪ねたりする」(比嘉さん)。そんな住民関係と相まって、実質的に年中無休の「見守り・見守られ」活動ができています。

この定時の道掃きが根付いた背景には、大正時代に始まったとされる「朝起き会」があります。

朝起き会は、島の子どもたちが早朝学校に集まり、ラジオ体操とランニングをしたあと、数班に分かれて道掃きをするもの。かつては旧正月などを除き毎朝、集落全域で行われていましたが、児童・生徒数の減少に伴って休みの日が設けられ、活動範囲も縮小。現在は月・水・金の週3回、学校周辺の道に限って続けられています。そして、子どもたちに代わって大人、特に高齢者が、道掃きを徹底するようになりました。

生活支援の仕組みやサービスを新たに立ち上げようとする前に、こうした生活文化をきちんと評価し、安心して暮らせる地域づくりに生かしたいものです。

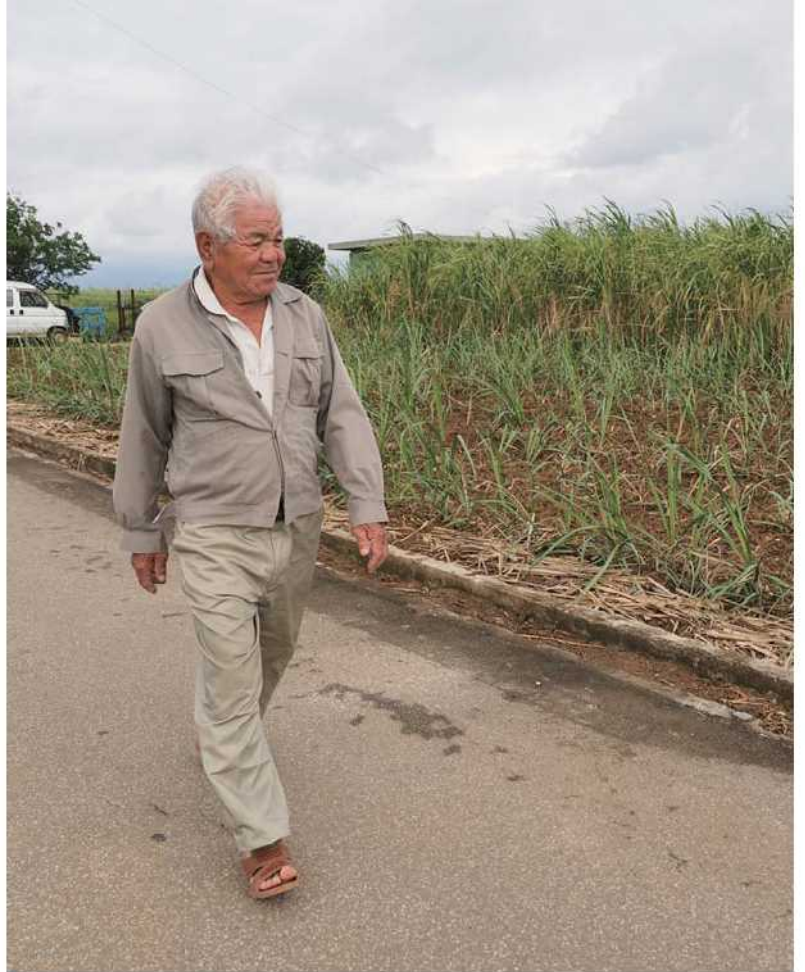




夕方にはゲートボール



プレーの合間にする仲間との会話も楽しみ



繁忙期でなくても毎日サトウキビ畑を見回る

## 地区全体が一つの家族

高江洲 常功さん(76歳)〈多良間村〉

多良間村の農業就業人口は、平成27年の農業センサスによると301人。村の人口の4分の1を占めます。その約43%、130人ほどが60歳以上。高齢世代は村の農業、特に基幹作物であるサトウキビ栽培の重要な担い手です。

高江洲常功さん(76歳)は、村の製糖工場を定年退職したあと、サトウキビ栽培を始めました。

「ただ家にいるだけでは、体の調子が悪くなる。人間は仕事を持つているほうがいいよ」

自治会役員や民生・児童委員などを歴任、ボランティア活動にも取り組みましたが、いずれも毎日やることがあるとは限りません。

そこで、農家になる決心をしました。「畑仕事はいい運動。健康になるよ。村の産業振興にも貢献できるしね」

栽培面積を徐々に拡大し、いまでは7ヘクタール規模。多量収穫者として表彰されるほどです。

「キビは愛着をもって接しないとよく育たない。子どもを育ててみたいね」

20年ほど前に妻を亡くし、以来ひとり暮らし。2人の娘は那覇にいます。家事はすべて自分でこなしますが、農作業は、植え付けや収穫などを

繁忙期だけ、人を雇って乗り切っています。

農閑期は、午前中は畑を見回って生育状況などを確認。そして夕方、ゲートボールを楽しみます。

多良間はゲートボールが盛ん。村老人クラブ連合会の会員約380人のうち、愛好者は少なくとも100人。村内8地区すべてにチームがあります。

高江洲さんは、大木地区の老人クラブ会長としてチームを率いる立場。

ゲートボールは65歳のとき「老人クラブの先輩に勧められて仕方なく」始めました。ところが、「やってみると実に楽しい。プレー自体も面白いけど、仲間と会っていろいろな話ができるのがいい。コミュニケーションは大事。それがこの島のよさでもある」。

「島のよさ」については、こつも話しています。

「地区全体が一つの家族みたいよ。具合の悪い人がいればすぐわかる。誰かが必ず家を訪ねて助けてあげる。お葬式なんかも地区全体で出している。何でも助け合ってやってきた」

その多良間で、仲間とともにぎりぎりまで元気に暮らし続ける。それが高江洲さんの目標です。





輝く笑顔も元気の証し



庭の一角でゆんたく



カラオケ愛好会

## 自分の家で暮らしたい

糸洲 ツルさん(87歳) 〈多良間村〉

集いの場とゆんたく仲間を持つ人ほど、高齢でもひとり暮らしになっても、いきいきと生活しています。

多良間村額間区に住む糸洲ツルさん(87歳)も、その一人。

ほぼ毎日、夕暮れまでの涼しい1時間ほどを、ゲートボールをして過ごします。

開始時間の少し前、チームの仲間たちが、糸洲さん宅にやって来ます。ちよつと早めに来て、庭の一角や家のなかで、ゆんたくするのでした。そのあと一緒にゲートボール場へ。プレーが始まって、ゆんたくは止むことがありません。

週に1度は、村役場や社会福祉協議会主催の介護予防教室に参加します。さらに月に1度は「カラオケ愛好会」。糸洲さんをはじめカラオケ好きの60〜80歳代の女性6人が、居酒屋の個室を借り、「飲んで・食べて・歌って」を楽しみます。

カラオケやゲートボールといった「活動」のほかに、活発なご近所付き合い「も」もあります。近くに住む友人とは日頃からお互いの家を行き来し、ゆんたくしたり、畑で取れた野菜を分け合ったりしています。

糸洲さんは、家の隣に5畝(約500㎡)ほどの畑を持っています。畑仕事をする午前中の1、2時間のうちにも、よく友人が訪ねてきます。そんなときは作業の手を止めて日陰でゆんたく。

収穫した野菜のほとんどは、友人にあげるか、子どもたちに送ります。子どもは5人。末娘以外は、全員島外にいます。

「那覇にいた子どもが、心配して『もつ島を出たらどうか。こっちで一緒に住もう』と言う。でも私は島が好きだし、夫と建てたこの家を離れたくない。だから「私は元気、大丈夫」という証拠に野菜を送るの」

野菜づくりだけでなく、ゲートボールもカラオケも、普段のゆんたくも、糸洲さんの元気の秘けつ。そして「私は元気」と周囲に示すサインでもあります。

夫は2年ほど前に亡くなり、糸洲さんはひとり暮らしになりました。末娘は毎日様子を見に来て、おかずを差し入れたり、力仕事が必要なきには夫婦で手伝ってくれたりしています。

糸洲さんの周りには、ごうした人のつながりこそ島の宝。守り、受け継いでいきたいものです。





ゆんたくする當間セツさん(右)と高江洲ノブさん



苧麻の糸づくり



右手前が苧麻。中央の木はパパイヤ。後ろにはバナナも

## よく働き、よくゆんたく

當間セツさん(85歳)

高江洲ノブさん(85歳)

〈多良間村〉

得意なことを生かして、周囲からの感謝や、年金以外の収入を得る。

ゆんたくやおすそ分けの習慣を大事にし、友人との親交を深める。

この二つは、暮らしのなかにある最高の介護予防でしょう。

多良間村大木区の當間セツさん(85歳)は、宮古上布や八重山上布に使われる苧麻(「ちよま」「からむし」、島言葉で「ぶう」とも)の糸をつくっています。

自宅居間の座椅子に腰を下ろし、視線はずっと手元に落としましたま。両手の指先を細やかに動かし、髪の毛ほどしかない苧麻の繊維をつなぎ合わせていきます。器用さ、丁寧さ、辛抱強さが求められる作業です。

「苧麻は子どもの頃からやっていた。お母さんの手伝いをしていたからね。お母さんは機織りや染色もしていた。私はそれはやらないけど、糸をつくって売っている。それが私の仕事」

年に何度か宮古・八重山から業者が来て、糸を買い取ります。年間8〜10万円ほどの収入になるそうです。

苧麻はイラクサ科の多年草。當間さんは自宅敷地で栽培しています。年に

数回刈り取って茎を水にさらし、皮をむいて繊維を取り、乾燥させます。そしてようやく糸づくりにかかります。

「脚が痛いから、庭に出るのも畑仕事をするのも、杖をついてやっています」

當間さんはひとり暮らし。耕耘機の運転など力仕事は、近所のいこが快く引き受けてくれています。

一番のゆんたく仲間が、すぐ近くに住む高江洲ノブさん(85歳)。

「ノブさんは、私のことを見守ってくれる。手料理も持ってきてくれる。とつてもありがたい」

高江洲さんは現役の農家で、89歳の夫・常勝さんと二人でサトウキビ栽培や肉牛飼育を手がけています。

「調子はどうかーって、よくセツさんの家を訪ねる。以前は夜もしょっちゅうゆんたくしに行っていた。いまは昼だけになっている」

集落外の農地へ自転車で通う健脚の持ち主です。

「80代半ばで、二輪の自転車に乗っているのは、島で私だけかもしれないよ」

よく働き、よくゆんたくする——そのたいせつさが、二人のいきいきとした姿から伝わってきます。





歩いている最中もゆんたくは止まらない



苧麻の糸づくりをする羽地久子さん



ウォーキングの折り返し地点、中学校前のベンチで休憩ゆんたく

## 仲間と歩く「元氣道」

羽地 はねじ 久子さん (84歳)

来間 くりま 正子さん (85歳)

〈多良間村〉

羽地久子さん(84歳)は、多良間村吉川区の自宅で愛猫とふたり暮らし。

前頁で紹介した當間セツさん同様、苧麻の糸づくりをしています。當間さんが子どもの頃から苧麻に関わってきたのに対し、羽地さんは70歳代後半になってから栽培や糸づくりを学びました。糸を宮古や八重山の業者に引き取ってもらえるようになったのは、3年ほど修行を積んだあと、80歳のときです。

このチャレンジ精神の源は何かと聞くと、「こう答えてくれました。

「孫のなかで一番小さいのが、いま高校2年生。せめてこの子が大学を卒業するまでは、自立した生活を続けたい。私が90歳になるまではね。だからいっしょやっついで」

健康づくりのために、朝はまず庭でラジオ体操。そして周囲をウォーキング。さらに1畝(約700㎡)ある畑で農作業に汗を流します。

畑では、苧麻のほか野菜、豆類、イモ類などを育てています。収穫は離れて暮らす子どもたちに送ったり、近所に配ったり。

「野菜をつくって人にあげるのが大好き」陽射しが強くなる時間は、家のなかで苧麻の糸づくり。

夕方、再びウォーキングに出かけます。夜には、また少し苧麻の作業。

「畑や苧麻をやっていると体の痛いのも忘れる。ゆんたくしてるときもね」

近くに住む来間正子さん(85歳)は、羽地さんのゆんたく仲間。夕方のウォーキングも一緒にします。歩いている最中は、ずっとおしゃべり。実は二人とも耳が遠くなっているのですが、不思議と話を通じます。

聴力が比較的保たれている羽地さんが、来間さんとほかの人の間に立つて「通訳」することもある。

ウォーキングだけでなく、お互いの家をよく行き来してゆんたくします。

「世間話や昔の思い出話をして笑い合っている」と来間さん。

来間さんもまた、ひとり暮らし。村内に娘がいて、同居という選択もありますが、歩けるうちは世話にならないと決めています。

「90歳までは元気ががんばらないといけないよ」

そう言っている二人は日々、楽しくゆんたくしながらお互いを見守り、励まし合っています。ぎりぎりまで自宅で暮らし続けるのに一番必要なのは、気の合うゆんたく仲間かもしれません。





店内のイートインに老若男女が集う



ふくやまスーパー



店主の譜久山ゆかりさん

## 島のお店は貴重な居場所

ふくやまスーパー〈与那国町〉

「ふくやまスーパー」は、食料品や日用雑貨などの生活必需品を扱う与那国町祖納区そないの老舗小売店。

テーブルとイスが並ぶイートイン（Ⅱ店内で購入した食品を食べる場所）があり、そこがゆんたく場になっています。

客は、買いものの用がなくとも訪れ、店主が入れてくれるコーヒーをいただきながら、のんびり世間話をしたり、さまざまな生活情報を交換したり。

コーヒーは元々無料でしたが、常連たちが申し合わせ、自主的に一杯100円を払っています。お茶菓子は持ち寄り、店で購入するほか持ち込みも可。手づくりケーキを持参して、皆に振る舞う人もいます。

日中は70〜80歳代の高齢者が多く、夕方になると仕事帰りの40〜50歳代の人たちも来ます。さらに、子どもたちの姿も。

下校時間に家に誰もいない子どもが、店で宿題をしたり、居合わせた人とゆんたくしながら、親が迎えに来るのを待ちます。学習塾の日には、塾に行く前に子どもたちが店に集まり、しばしゲームなどで一緒に遊んでいます。

店は原則として年中無休。朝8時〜

夜8時の営業で、この時間帯なら好きな時間に来て、帰りたいときに帰ることがができます。

近くに住む89歳の女性は、ほぼ毎日店を訪れます。開店と同時に来て、お昼には家に帰り、食事を済ませるとまた来ます。そして夕方まで店にいます。

この女性は、娘と二人暮らし。娘は仕事で日中は家を留守にしていますが、昼休みにいったん家に戻り、母親と昼食を取って再び職場へ。そして夕方、店にいる母親を迎えに来るのです。

女性は以前、体調を崩して要介護認定を受け、デイサービスに通いました。しかし、どうしてもデイサービスになじめず、代わりにスーパーへ通うようになったのです。

店主の譜久山ゆかりさん（55歳）が、ほかの常連たちとともに、この女性や子どもたちを見守ります。

イートインを設けたのは1年ほど前。島の食堂が休業する日曜に、観光客が食事できる場所を提供しようと考えたのです。

気さくで優しい譜久山さんの人柄を慕って、島の老若男女が集まり、誰もが安心して過ごせる貴重な居場所になりました。





畑仕事をする祖納元武さん



崎原孫良さんの長命草畑



祖納元さん宅でのゆんたく

# 畑 でつくる健康長寿

そなもと

祖納元 武さん(84歳)・マサ子さん(77歳)夫妻

崎原 孫良さん(67歳)

〈与那国町〉

祖納元武さん、マサ子さん夫妻(84、77歳)は、与那国町でガラス店を営む傍ら、現役農家として長命草、サトウキビ、ゴマなどを栽培しています。天気が荒れなければ、朝夕二人で畑へ。

「無事に収穫できたときは本当にうれい」と武さん。「働くのが楽しい。働き続けるのは、健康にもいいことだと思っついぬ」。

友人が家を訪ねてくれたり、自分が友人宅を訪ねていって親しく交流するのも「また楽しみ」。

取材にお邪魔した日も、祖納元さん宅には友人や近所の親類が来てゆんたくしていました。

崎原孫良さん(67歳)は、長命草の栽培農家。13年前に脳梗塞を患い、右半身のまひと言語障害が残っています。

かつては船乗りや漁師として働いていましたが、後遺障害のために海の仕事は断念。「リハビリを兼ねて」(崎原さん)農業を始め、以来、長命草の栽培を続けています。

自宅でのひとり暮らし。

退院後しばらくは、ホームヘルパーや配食サービスを利用しました。現在、それらはまったく使わず、崎原さんは

完全に自立した生活を送っています。

夕方畑仕事を終えると、ふくやまスーパー(前頁記事)に立ち寄りませう。「ここに来てしゃべるのもリハビリなんだよ」

なかなか言葉が出ないときも、ゆんたく仲間たちはのんびり構えて崎原さんとの会話を楽しんでいきます。

「ずいぶんスムーズに話せるようになった」と、以前の崎原さんの状態を知る人たちは口をそろえます。

祖納元夫妻も崎原さんも、畑仕事やゆんたくで、島の特産品ばかりか自分たちの健康もつくっています。

なお、有機栽培の長命草は、農業生産法人与那国薬草園が買い取ります。

同社は一次加工(乾燥)を行い、美容食品の原料として大手化粧品会社に出荷するほか、粉末を練り込むなどしたそうめん、ちんすこう、あめなどを食品メーカーに製造委託し、自社ブランドで販売しています。

平成30年12月時点で契約栽培農家は59戸。栽培の担い手の8〜9割が、60歳代から上の世代だそうです。

高齢者が島の長命草産業を支え、長命草の栽培が高齢者の元気を引き出しています。





田島トモエさん(右)宅でのゆんたく



稲蔵まさのさん。豆腐づくりの作業場で



町社会福祉協議会のミニデイ・サービス

## 与那国の情け、いつまでも友だち

稲蔵 いねくわい まさのさん(85歳)

田島 トモエさん(88歳)

〈与那国町〉

稲蔵まさのさん(85歳)の一日は、午前3時に始まります。家は「稲蔵とふ店」。与那国町で唯一の豆腐屋さんです。息子やいとこの女性とともに、暗いうちから島豆腐づくりに精を出します。

息子夫婦や孫夫婦、ひ孫らと同居で8人家族。

豆腐づくりをして一休みしたら、月曜と木曜は「花ゆりサロン」に出かけ、火曜と金曜は「ミニデイ・サービス」(いずれも町社会福祉協議会が主催)に参加。

サロンやミニデイの前後の時間帯や、開かない日は、すぐ近くに住むゆんたく仲間の家へ。

ゆんたく仲間は、向かいの家に住む田島トモエさん(88歳)。

「トモエさんとは若い頃からずっと友だち。毎日のように遊びに行く。ゆんたくするのは楽しいし、元気になる。それに、行かないとトモエさんのことが気になって仕方がないからね」と稲蔵さん。

田島さんはひとり暮らし。膝などに痛みがあり、歩行が少し不自由です。出歩くときはシルバーカー(押し

車を使います。

天気が良ければ、朝、近くの浜沿いの道を30分ほどウォーキング。また、毎週月曜の午前だけ「花ゆりサロン」に行きます。

診療所や買い物に行くときなどは、近所にいる息子が、車の運転ができる友人が手伝ってくれます。

1日1回、町の配食サービスを利用する以外、家事は自分でこなします。

「住み慣れたこの家で暮らし続けたい。だから、できることは自分でする。たとえ息子と一緒に暮らせるとしても、別のところには行きたくない」と田島さん。

体調が悪かったり、困りごとがあれば、まず稲蔵さんに電話。すぐに駆けつけてくれるそうです。

「まさのさんが家に来てくれて、一緒におしゃべりすると、体の具合の悪いのも忘れてしまう。いつも感謝しています」と田島さんが言えば、稲蔵さんは「友だちだからね。当たり前ですよ」と返します。そして与那国の民謡にならいいい話すのでした。「与那国の情け、命ある限り、いつまでも友だち」。





鹿川さん宅の玄関先がゆんたく場



アカマチ会の初プレー(平成30年12月12日)



久部良区のグラウンド・ゴルフサークル「アカマチ会」

## 冬の緑地に笑顔が咲いた

ゆんたくと「アカマチ会」へ与那国町へ

与那国町久部良くがらにある鹿川義昭さん、初子さん夫妻(79、73歳)の家は、地域のゆんたく場。近所に暮らす60〜80歳代の女性たち4、5人が毎日來ます。初子さんはもちろん、ときには義昭さんやその友人もゆんたくの輪に加わります。

玄関先のひさしの下にイスが置いてあり、夏の間はそこで、冬は家のなかで、おしゃべりを楽しみます。

鹿川さん夫妻が留守でも、ゆんたく仲間が構わずやって来て、イスに腰を下ろし、のんびり過ごしていきます。

もう20年あまり続いていきます。同居する息子、漁師の明さん(48歳)は、これを嫌がるどころか「ごんごんやつて」と応援しています。

最高齢のゆんたく仲間は89歳。日中はひとり暮らし状態で、姿を見せないことがあると、初子さんは電話するか直接訪ねて「うちに来てゆんたくしましょう」と誘っています。

仲間の一人、野底美八子のぞこみやちさん(66歳)は「こういう憩いの場がもったくさんあれば、久部良は今よりずっといいところになる」と話します。

同じ思いを持つ60〜80歳代の男女9人が、平成30年12月12日、グラウンド・

ゴルフのサークル「アカマチ会」を結成、同日初めてプレーしました。鹿川さん夫妻と野底さんも参加。義昭さんは「最高に楽しいね。健康にもいいよ。こうして久部良の仲間と顔を合わせれば、心もつながるよ」と喜びます。

会の活動場所は、港に面した緑地公園。雑草が生い茂るままになっていましたが、町社会福祉協議会のあと押しを受け、サークル参加希望者が初プレーの2週間ほど前、2日間かけて環境整備を行いました。

そのとき強力な助っ人となったのが、明さん。ゴルフコースの確保に苦労していると聞いて駆け付け、重機や草刈り機を運転、大車輪の活躍を見せました。

「緑地をきれいにしておけば、お年寄りだけでなく子どもも遊べる。子どもやお年寄りの元気と笑顔は、地域の活性化につながる。魚に出られない日はどうせヒマ。その時間を生かしてこれからも協力する」とそう言っていて明さんは少し照れくさそうにほほ笑みます。

美しく整地された冬の緑地に、笑顔の花が咲いたのでした。



# 「お宝探し」の作法と効能



これまで見てきたおじい・おばあ

たちは、暮らしのなかに介護予防的な活動を持ち、近隣の仲間同士で支え合う関係を築いています。長い時間をかけて培われた地域の人間関係と、ゆんたくに象徴される生活文化が、事実上の生活支援につながっています。

介護・福祉のサービスをどれだけ充実させても、ゆんたく仲間への代わりにはならないでしょう。高齢でも暮らしやすい地域を目指すなら、既存の人間関係や生活文化といった「お宝」の価値を適切に評価し、生かす方策が求められます。

その前提として、まずおじい・おばあへの暮らしぶりを知らなければなりません。

参考までに、全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）職員が、どのようにお宝を見つけ、取材したか、簡単に振り返ります。

大まかに三つの段階があります。

第一に、行政や地域包括支援センター、社会福祉協議会の関係者との「何がお宝か」なぜそれがお宝か

についての認識の共有。

CLC職員が、これら関係者とともに現地取材を開始する前に、打ち合わせをして認識を共有しました。そのうえで、80、90歳になっても自宅でお宝に暮らししている人「おじい・おばあが楽しくゆんたくする場」を取材対象とする方針を固めました。

第二に、取材対象の選定。

行政、包括、社協などに候補をあげてもらったほか、共同店のスタッフなど地域の事情通にも協力を求めました。取材させてもらったおじい・おばあからも友人・知人・親類、集いの場などを紹介してもらい、そこからさらに別のところへと、数珠つなぎに取材対象を見つけることもしました。

また、行政や社協などが運営する介護予防サロンに行つて候補者を見つける方法も探っています。元氣なおじい・おばあと接触するため、サロンを利用するわけです。「サロンの日以外は何をして過ごしますか」「元氣の秘けつは？」などと聞き、「ゆんたく」「畑仕事」「グラウン

ド・ゴルフ」といった答えが返つてくれば、取材を申し込みます。

第三に、取材。おじい・おばあに生活支援体制整備事業の説明などは特にしません。ただ、その事業が目指すところや取材の目的は繰り返し伝えます。たとえば、「高齢になつても元気に自宅で暮らし続けるにはどうすればいいか、実際に元氣な人の暮らしぶりから学ぶために来ました」「誰もが暮らしやすい地域をつくるために、あなたの暮らしぶりはとても参考になります。それを教えてもらいたい。多くの人に知ってもらおう価値があります」というふうに、目的を理解してもらえば、あとは日々の暮らしの様子を聞いていきます。その暮らしぶりのお宝としての価値も、現場で伝えます。たとえば、次のように、「ゆんたく仲間がいることで、孤立を防いだり、困ったときに支え合ったりできるんですね。仲間がいることは、高齢でもひとり暮らしになつても、自宅で安心して生活し続ける助けになりますね」。



与那国町の「ふくやまスーパー」。町社会福祉協議会の生活支援コーディネーター（左端）が店内のゆんたく場を取材

取材内容を記事にしたり、イベントなどを開いて発表すれば、お宝に対する理解を広められます。お宝をどう守り、増やし、受け継いでいくかについて話し合えば、それもまた「協議体」です。ゆんたくの場で話題にしてもらうだけでも、そこに居合わせた人たちにとっては最も身近な日常生活圏域の協議体となり、それ自体が地域づくりになるのです。



# 「お宝探し」評価と感想

沖縄県生活支援コーディネーター試行的派遣業務に対する、各町村の生活支援体制整備事業担当者の評価や感想を紹介します。なお、文中登場する「木村」は、全国「ミニミニライフサポートセンター（CLC）職員で、同業務担当の木村利浩を指します。

## 〔国頭村（地域包括支援センター・社会福祉士）〕

国頭村の「地域のお宝探し」を行うにあたって、地域包括支援センターからお宝を持っていそうな高齢者を2人紹介しました。木村さんの取材に同行し、高齢者とのやり取りを見せてもらいました。私たちでも知らない話をうまく引き出していました。紹介した2人のうち1人は、自宅が近隣住民の集まる「ゆくい処」（憩いの場）となっていました。「これぞお宝」と木村さんに言われ、皆驚くと同時に自分たちや地域にとって「いいことなんだ」と気づくことができました。

国頭村でも、共同店が閉店したり、高齢者の気軽なゆくい処が減ってきている現状があります。私たちも改めて地域や人のつながりに目を向け、「お宝」が広がっていくようにしたいと思います。

## 〔渡名喜村（民生課・保健師）〕

渡名喜村では、生活支援コーディネーター配置の意義を早期から理解し、募集をしていますが、応募がない状態が続いていました。県担当者にもその旨伝え、「別の離島へき地で実施してもいいのではないか」とお話したのですが、県担当者の強い勧めもあって、本村で業務を実施することになりました。

業務の成果報告は、私が思った以上に高齢者の心をつかむものであり、高齢者が話してくれた「島のお宝自慢」を写真や文章などで「見える化」し、その高齢者自身をはじめ住民に広く提示することのたいせつさに気づかされました。本業務を通じて、生活支援コーディネーターの仕事に求められているものを知ることができました。



## 〔多良間村（地域包括支援センター・社会福祉士）〕

多良間村は、高齢化率の割には要介護認定率が低くなっています。理由として、生涯現役で畑仕事を続けること、伝統行事やゲートボールなどで高齢者が年中忙しく過ごしていることがあげられます。これらが多良間のお宝で、こうした暮らしをできるだけ長く続けてもらうことが重要だと、木村さんは指摘しています。この点を踏まえ、私が関わるボランティアグループで、さっそく「ばるまっちゃん畑のお店」という取り組みを始めました。伝統行事やゲートボールがない時期、高齢者が家庭菜園でつくった野菜を買い取って販売する新たな仕組みです。

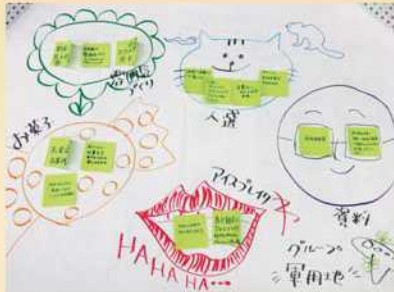
また、料理を持ち寄り、参加者が世話人にもなるサロン、「お持ち寄りカフェ」おにぎりの会」をスタートさせました。いまあるものでできることを生かし、高齢でも暮らしやすい地域づくりを進めたいと思います。

## 〔与那国町（地域包括支援センター職員、社会福祉協議会・生活支援コーディネーター）〕

おじい・おばあが団らんしている日常的な光景もだんだん減ってきています。それを気にもとめない現代の風潮のなかで、木村さんのお宝探し取材は、何気ない団らんの背後に隠れた大事な意義を明らかにするもので、住民の意識改革にもつながると思えました（地域包括支援センター職員）

「地域のお宝」が、与那国にもたくさんあることに気づかせてもらいました。普段の近所付き合いが、実はお互いの支え合いにもつながっていることがわかりました。小さな島でできている支え合いに気づくことができましたのは、よかったです。与那国のお宝を生かし、より住民を巻き込んだ地域づくりを展開していきたいと思えます（生活支援コーディネーター）





特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンターは、沖縄県より「県生活支援コーディネーター養成研修等事業」を2016(平成28)年度より受託しました。県内市町村の取り組み状況に応じて研修プログラムを組み替え、また、「生活支援コーディネーター試行的派遣業務」に取り組んだことが特徴です。

●2016(平成28)年度

「初級研修」および「実践研修」を全5回開催し、延べ392人の参加がありました。加えて「生活支援コーディネーター試行的派遣業務」を、国頭村にて1月31日～2月3日に実施しました。

●2017(平成29)年度

「初級研修」「基礎研修」「実践研修」「応用研修」を全6回開催し、延べ424人の参加がありました。加えて「生活支援コーディネーター試行的派遣業務」を、渡名喜村にて1月21日～26日に実施しました。

●2018(平成30)年度

「初級研修」「基礎研修」「実践研修」「応用研修1・2」を全5回開催し、延べ331人の参加がありました。加えて「生活支援コーディネーター試行的派遣業務」を、多良間村にて11月25日～30日に、与那国町にて12月9日～14日に実施しました。

2019(平成31)年2月

発行:特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 シンエイ木町ビル1F  
TEL : 022-727-8730 FAX : 022-727-8737